



Live配信特別企画「学長と話そう！」事前質問 曄道学長からの回答

2020年9月13日(日)に実施しましたLive配信特別企画「学長と話そう！」では、事前に高校生の皆さんから多くのご質問をいただきました。Live配信当日は、曄道学長が6名の高校生からの質問にZoomで直接お答えしましたが、当日回答できなかった質問につきましても、改めて学長にご自身の言葉で返答をいただきましたので、今回こちらでご紹介させていただきます。

当日質問をしていただきました高校生の皆様、並びに事前にご質問をいただきました皆様に、この場を借りて心より御礼申し上げます。

上智大学 入学センター

Q. 新型コロナウイルスの影響でオンライン授業になっていますが、学長ご自身は、オンライン授業になっていることについてどのように思われていますか？個人的なお考えをお聞かせください。

A. オンライン授業に対する議論にはふたつの側面があると思います。ひとつは授業の質の問題、もうひとつはその可能性の問題です。前者は、オンラインであっても対面であっても求められるレベルをクリアしなくてはなりません。これは教育を提供する側の責務です。一方、オンライン環境が有する、教育の可能性には大いに期待しています。皆さんの学びの自由度も大きく向上するでしょう。むしろこのことに関して皆さんの期待が大学に向けられると良いなと感じています。

Q. コロナ禍において、わたしたち高校生、そして、大学生ができる社会貢献は何だとお考えですか。また、上智大学として例えば医療関係者への寄付活動など、大学として貢献していることがあれば教えてください。

A. 皆さんが果たすべき社会貢献は、「コロナ禍による社会の混乱に俯瞰的に目を向け、課題を考えること」だと思います。この状況下で困難と向き合う方々も大勢おられます。寄付活動などでの貢献はもちろん大事ですし有効なものでしょう。ただ、今後の社会のあるべき姿を考える問題意識が社会の中で醸成されることこそが重要です。そして中長期的には、特に若い方々がこのことに向き合うことこそが、社会の正しい変革を導く原動力になると思います。



Q. 新型コロナウイルスの影響で、国境を超えた人の往来ができない世の中になっています。長期戦が予想される中で、今後グローバル化はどのように進んでいくのか、あるいは衰退してしまうのか、学長のご意見をお聞かせください。

A. 私は、グローバル化とは定義づけができないものだと考えています。社会の変容によって、求められるグローバル社会の姿も変わっていくでしょう。例えば、まさにコロナ禍によって物理的な往来が止まってしまったら、それぞれの国が独立した発展を目指すでしょうか？それは難しいでしょう。新しいグローバル化について社会は考えていかななくてはなりません。人は移動しなくても、物も情報も移動します。この中で果たされるグローバル化とは？まさに皆さんが考え、展望する課題だと思います。

Q. 国際感覚を身につけるために学長が学生時代から現在まで意識されていることは何ですか。

A. ひとことで言うと、自分の“身近”を世界に広げる意識を絶やさないことです。今回のコロナ禍は、世界共通の望まぬ経験であり、その痛みを共有することができているかもしれません。しかしながら、貧困、紛争、難民などのさらに多くの課題について、私たちがその現実を知る機会は極めて限定的です。それが“身近な出来事でないから”だとしたら、悲しいことですよね。

Q. 知識ではなく学ぶ力そのものを身につけるには、どのように取り組むことが必要ですか。また、それに向けて高校生の間に来ることはありますか。

A. 社会が目まぐるしく変化する時代においては、自分自身の立ち位置を明確にすることは重要だと思います。それは、信念や志に支えられるものであると思いますが、その信念や志を産み出す源泉は、高度な専門性だけではなく、やはり教養や、人と人とのつながりが大きなウェイトを占めるでしょう。そして自分が欲する智だけでなく、また蓄える知識だけでなく、自分が普段触れることのない分野や事象から、創造的な着想に結び付ける訓練が必要ではないかと考えます。

Q. 国際通用性という意味で、宗教を通した世界観を得るにはどのように生活していくべきですか。

A. 宗教を通した世界観を身に付けるためには、世界の国々、地域に根差す事象（政治、経済、文化ほか）が宗教との関わりでどのように発展を遂げてきたのかを紐解くのが良いのではないのでしょうか。その上で、その多様性のある集団の中で、時事問題などを議論する場があるとなお良いと思います。上智大学では、90か国からの学生が集うグローバルキャンパスという環境の中で、様々な課題について議論する機会を用意し、地域や文化的背景の異なる学生同士の相互理解を深める場を提供しています。

Q. 今後大学で行われるイベント、または、過去に行われたイベントなどで、SDGsに関する企画があれば教えてください。

A. 「上智大学国連Weeks October 2020」（2020年10月6日～24日まで、Zoomによるオンライン開催）に参加してみてください。高校生も参加できるプログラムが多くあります。この中で取り上げられるTopicの多くはSDGsに直結する話題です。上智大学では、「国連Weeks」と呼ばれるイベントを年に2回行っており、国際機関の要人も参加します。また、2017年には、グテーレス国連事務総長が四谷キャンパスに來校し、「グローバル課題～『人間の安全保障』の役割～」(Special Lecture “Global Challenges: The Role of Human Security”)というテーマで特別講演を行っていただきました。その他、上智大学のWebサイトにも、本学のSDGsの取り組みの一覧が紹介されています。



Q. 上智大学は国際機関との連携が強いと聞いたことがあるのですが、実際に国連で行われていることを大学で体感できる機会はありますか？具体的にどのようなことが行われているのか教えてください。

A. 学部生向けには、国連研修というプログラムが用意されています。ニューヨークの国連本部やジュネーブの欧州本部で国連の職員から講義を受けたり、引率する教員とディスカッションを行ったりするプログラムです。まさに国連の最前線で活躍する方々に自分の意見をぶつけ、議論を行う高度な教育プログラムとなっています。

Q. ジュネーブ国際・開発研究大学院での具体的な学びや参加資格を教えてください。

A. ジュネーブ国際・開発研究大学院への3+2プログラムは、上智で3年間学んだ後、国際機関で活躍する卒業生も多いスイス・ジュネーブの協定校、国際・開発研究大学（Graduate Institute）へ2年間留学し、最短5年間（春入学の方は、学年歴の差もあるため5.5年間）で学士と修士、2つの学位取得を目指すプログラムです。上智の4年次にあたる留学1年目は現地で交換留学生として学び、単位を換算して上智を卒業します。その後、一定以上の成績であれば、2年目はGIでの正規生として留学を続け、修士取得を目指します。現在の応募資格は、上智でのGPAが3.5以上であること、TOEFL iBTのスコアが100以上等で、入学後の上智での日々の勉強が大切です。なお、全学部から応募は可能ですが、最終学年に卒業に必須の実習等がある場合等は応募が難しいため、入学後に詳細情報をご確認ください。

Q. 暁道学長が考える、「今後のリーダーのあるべき姿」についてお聞かせください。

A. バランスではないでしょうか。グローバルとローカルな視野、過去と未来への視点、他者と自分の関係性などをバランスよく考え、配慮できる資質が必要だと思います。

Q. 暁道学長が考える「英語を学ぶ意味」についてお聞かせください。

A. 世界の情報量の8割は英語で表されたものと言われています。コミュニケーションはもちろんですが、この情報へのアクセスという意味でも、英語を学ぶ意義は明確です。

Q. 世界で通じる教養とは何だと思われますか。

A. 人智とは普遍的なものではありますが、同時に、地域や時代を反映する側面も持っています。世界で通じる教養とは、世界を俯瞰しつつ、事象と事象を組み合わせ、また時代と時代をつなぎ、異文化の垣根を越えて論考しながら形成される統合智だと思います。



Q. 日本の学校では人間性を養う、例えばボランティア活動などのカリキュラムが少ないと思っています。

暁道学長は、日本の学力重視の教育についてどう思われますか。

A. 人間性を養うという教育には、高等教育機関にとって最難関の課題です。個性を尊重しつつ、“豊かな”人間性を涵養するためには、題材を提供する側の教育精神や理念が大きく作用するからです。大学で学ぶにあたっては、その大学でどのような教育精神が具現化されて皆さんに提示されるのかをよく理解する必要があります。ボランティア活動も、参加することに意義があるのではなく、そこから何に気づき、何を考え、何に到達することができるのか、ということが重要で、これは受け手（参加者）の姿勢によっても大きく変わりますね。“日本の学力ばかり重視した教育”に関しては、いろいろな考え方があります。この議論のためには、学力とは何を測っているのか、を明確にしなくてはなりません。中学校・高校・大学で学ぶ、知識整理や思考力を高めるプロセスが学力のすべてを表すわけではありませんが、一方で知識整理や思考力を高める鍛錬は生涯を通じて必要な時代です。私は、テストの点が高ければ何事にも勝るかのような評価には同調しませんが、その鍛錬の目標として捉えていければ良いように思います。

Q. 上智大学で一番魅力的なプログラムは何ですか。

A. 一番魅力的…難しいですね。魅力的なプログラムはたくさんあると信じています。プログラムそのものも多彩に用意されていますが、「学びの環境」にも注目してもらいたいと思います。90か国からの学生が集う学びの環境、400に迫る海外のパートナー大学、国際機関・公的法人・NPOなどとの連携教育など、上智大学には、学生が少し背伸びをしたところにある学びの機会が豊富に用意されています。また、9学部29学科が集結した四谷キャンパスでは、様々な課題を議論する場が提供されています。これは、多様性のある環境で、自分の意見をぶつけ、また相手の理解に努め、そして合意形成を試みるという、グローバル社会での活躍に必要な素養、資質を身に付けるために十分な環境と言えると思います。

Q. 多様性を認め、共生社会を実現するために、他大学にはない上智大学独自の取り組みがあれば教えてください。

A. 上智大学の教育精神は「Men and Women for Others, with Others（他者のために、他者とともに）」という言葉で表現されています。他者とは、社会で片隅に追いやられる人達、弱者を指しています。例えば、コロナ禍で世界の経済は大きなダメージを受けました。早い回復が望まれます。政治、経済界のリーダーたちによる懸命な立て直し作業が始まっている中で、上智の卒業生には、そのようなときに弱者を置き去りにしない視線を有するリーダーになってもらいたいのです。

Q. 自分には今、将来に役立つような趣味や熱中できることが無いのですが、目標を見つけるための方法があれば教えてください。

A. 学びの目的は蓄積ではありません。発揮だと思えます。学びによって新しく見えてくるものがあります。そしてその視野が広がることで、自分自身に信念や志が生まれ、育ちます。それがいつかはわかりません。高校を終えたらここまで、大学を終えたらここまでという性質のものではないからです。私は、発揮できる“智”を自分の中に育てることこそ、人生を豊かにするのだと信じています。将来役に立つ何かを追求することも良いと思いますが、私は、「自分の生きる環境の反対側を知る」、「居心地の悪い環境に身を置く」、「自分の興味とは別世界の活動を試みる」ことをお勧めします。自分に新しい可能性を与えてくれると思うからです。



Q. 私が上智大学への進学という夢を抱いてから、6年が経とうとしています。

現在高校生ですが、自分の将来像を考えてやっと行き着いたと思ったらまた悩むことを繰り返しています。

曄道学長が高校時代にどのような夢を描いて、どのように自身の将来像を模索したのか教えてください。

A. 私は高校時代、野球に明け暮れていました。ご質問のように将来像を考え抜きながら日々過ごしていたわけではないので、恥ずかしながらお答えに窮します。ただ、それでは格好悪いので、今思うことをお伝えします。私は、皆さんの年代の時には、あまり将来像を模索しながら日々の行動を考える必要はないのではないかと思います。例えば、大学で何を学ぶかということについては、将来役に立つかどうかで考えることも大事ですが、今一番興味のある分野をとことん学んでみるのも良いと思います。役に立たない学びはないからです。役に立つということは、「知識の解放」ではなく、「智の発揮」だからです。発揮に一番大事なものは信念や志です。その信念や志に至るプロセスにおいて、自分の興味を智に昇華させるという経験ができる時間は、学生時代ならではのものです。私はそれこそが大学で学ぶ意義だと思います。

Q. 私は将来、海外で起こっている経済格差や貧困によって生じる教育格差の問題に関わり、何らかの形で貢献していきたいと考えています。しかし同時に、必死に生活している人々に対し、このように思うことは傲慢なのではないかとも思います。曄道学長は、世界の先進国においても広がりつつある経済格差に対し、私たちに何かできることがあると思われませんか。

A. 弱者のために何かを…これは傲慢な考え方か？高い問題意識を持たれてますね。そして、弱者を想う気持ちも伝わってきました。本当に難しいですね。私も自分の立ち位置に自信を持ったことはありません。格差社会の課題にどう向き合うべきかという問いに対して、何をしてあげられるかではなく、その人達とともにある自分がどう行動を起こすかを考えることが大事ではないでしょうか？“Men and Women for Others, with Others”という上智大学の教育精神における“with Others”とは、常に他者とともにある人を指しています。

